

アクション・リサーチのまとめ

学校名 岐阜県立大垣北高校

研究年度 21 年度 研究対象 (学年クラス等) 3年生 生徒数 318名(男子 189、女子 129)

科目名 英語Ⅱ 単位数 2 使用教科書名 UNICORN ENGLISH COURSEⅡ (文英堂)

学年の様子・特徴

生徒の大半は意欲的で、学習全般によく取り組んでいる。学習については予習や小テストに取り組んでいるが、3年生ということで、全体的な復習を始める生徒も徐々に増えている。教材の難化とともに行き詰まりを感じている生徒もおり、これまでの学習の積み重ねが、生徒たちの力に大きく反映しているように思われる。

問題の特定

3年生として、教材の難化に対応した指導の在り方を探求する。

- ① 19年度から引き続き、音読や書き取りなど、様々な角度から未知の英語に応用できる「英語の力」を伸ばす方策
- ② 学んだことを積み重ねていく方策
- ③ 科目や教材にこだわらず、英語科全体として「英語の力」を高める指導の方策

現状把握

A 授業観察・授業アンケート

① 従来取り組んできた学習方法が定着し、習慣化している。

例) スラッシュリーディングによる読み・内容理解の指導、教科書本文の音声教材の活用、教科書本文を利用した復習

- ② 文章の論理展開に注目して、英文の概要をつかむ姿勢と力が定着しつつある。
- ③ 読み取った内容について考え、意見をもつ機会が少ない。授業でこそできる取組を設定したい。
- ④ 扱う教材が難化するため、読むため、書くために語いの指導を工夫したい。

B GTEC

- ・ 全体として、グレード5以上が半数以上と、よく力を伸ばしている。
- ・ **Reading** では、段落間の論理構成や、事柄の因果関係をつかむ力が伸びている。WPMは平均99.0と、大半の生徒が情報検索のため速読できるレベルまでは達していると思われる。**Listening** でも英語を正確に聞き取る力が伸び、全体として伸びている。全校で取り組んでいる朝リスニングや毎日の授業における取り組みから、読み・聞く活動において英文全体をつかむ力が伸びているように思われる。これらに反して **Writing** では考えが十分に伝わらないような文法での減点が目立つ。

C 質問紙調査

- ① 3年生になり、家庭学習の時間の伸びが顕著になった。特に休日には半数以上の生徒が2時間以上を英語の学習に費やしている。内容は宿題と授業の予習と答える生徒が依然として多いが、「復習」を交えて答える生徒が増加した。
- ② 英字新聞や、ラジオやテレビの英語ニュースなど英語を使用することに自信をもつものは半数ほどとあまり大きな変化は見られない。ただ、教室での活動について「うまく読むことができる」「うまく書くことができる」と答える生徒が減少しているのは、教材の難化が関係していると考えられる。
- ③ 生徒間の力の差はあるが、ペアワークに積極的に取り組み、アイデアや疑問点を共有することで理解を深めている生徒が多い。
- ④ **Reading** では、文法や構文のやや複雑な英文をきちんと精読し、意図を正確に把握できる力を伸ばしたい。また語いを増やすこと・パラグラフの相互の関係をつかむことで、各段落の要点をまとめつつなぎあわせ、英文全体として論旨を把握していくトータルな力を目標としたい。
- ⑤ **Listening** は情報検索を中心によく伸びているが、さらに長い英文を集中して聞く力、論理構造に注目して聞き取り、話の要旨をまとめて整理したり、関連した他の情報と比較して要点をまとめたりする「要点理解」の力を更に伸ばしたい。
- ⑥ **Writing** については、伝えたい内容に対する語いの少なさが依然として課題である。今回は文法的な減点も目立っており、正しく意図を伝えるためにも、コロケーションや文法に留意して書くことを課題としたい。
- ⑦ 発展的な活動として、正確な読み取りや聞き取りを基に意見を述べる活動、英語で表現していく活動まで挑戦したい。

リサーチ・クエスチョン

「使える英語」の力を様々な角度から伸ばす方策；
「読める」「書ける」「聞き取ることができる」！

＝学習の積み重ねにより、未知の英語に応用できる英語力を身に付けられるのではないか。

仮説・実践・検証

仮説 1

実践 1

検証 1

<読む活動>

◇19年度からの継続・発展

- ・読み取る前に、本文の内容に関する活動を設け、本文の全体像についてテーマを理解した上で読み進めることで、正確に読む力が向上するのではないか。
- ・文章の論理展開に注目することで読む速度が高まるのではないか。

- ・パラグラフ内、パラグラフ相互の関係、それぞれに目を向けて、英文全体のテーマをとらえつつ、詳細を読み進めるよう促す。
- ・文章中のディスコースマーカに注目し、問題提起・例示・説明の具体化・結論など、英文の論理展開を意識しながら読み進めるよう促す。英語の論理展開の感覚を身に付けるよう促す。
- ・論理をつなげることはコミュニケーションにかかわることを意識させ、段落間のつながりなどに留意させる。

<生徒の感想・テスト等の評価から>

- ・正確な読み取りと、文意の理解が向上した。具体的には、英文を読み取り、100字程度の日本語で要約するような設問や、読み取った内容について意見論述するような設問に対応できるようになった。
- ・読み取った英文の論理展開を参考としながら、自由英作文など100語を超す英文を論理的に展開して書くようになった。

仮説 2

実践 2

検証 2

<語い>

英文の中で読み取ったものと結び付けること・例文の活用・英英辞典の活用を通じて、語い力が向上するのではないか。

- ・その場ですぐに分からない単語の意味を調べる姿勢からの脱却をする。
- ・英文読解では、文脈からヒントをつかみ、読み進めて語句の意味を予想しながら理解し、かつ文脈に合った内容理解ができるよう促す。
- ・意味を調べるだけでなく、類語辞典・英英辞典を活用した(紹介も含めて)パラフレーズ、例文を活用した理解、反例の提示など、「次回見たら分かる」ことを意識して指導する。特に生徒の中では電子辞書が普及しているので、活用することを念頭におく。
- ・様々な分野の文章を読むことで、語いの幅を広げる。
- ・英作文では、言い換えに注目し、構文や語いの増加を意識して指導する。

<生徒の感想・テスト等の評価から>

- ・接頭語、接尾語など語の成り立ちに注目し、意味の分からない単語を類推し、かつ文脈から判断して読み進めるようになった。
- ・普段から派生語や反例に注目し、電子辞書内の複数の辞書(特に英英辞典)を参照し、使用する場面・コロケーションを確認すること、その意味における用例を確認することを重点的に指導した。その結果、英作文など、英語での表現力が向上した。
- ・英作文では、元の文の意図を考えながら様々な表現にチャレンジし、定型にのみ収まらない、よりナチュラルな英語表現を目指すようになった。

仮説 3**実践 3****検証 3**

<アウトプット+復習>
 ◇19年度からの継続・発展
 英語を「書く」活動を多く設定することによって、定着が進むのではないか。「読む」「書く」ことを区別せず、英語としてアウトプットすることを目指す。

- ・英語を適切に書くよう促すため、英語Ⅱやリーディングでも英語を書くようテストの設問を工夫する。
- ・教科書で扱った事項を、形を変えて、反復して練習する機会となるよう、副教材を活用する。また授業での取り組みを授業内にとどめず、各自で生かして副教材に取り組むように促す。
- ・文法に注意して「乱れなく」書くことはもちろん、読解で得た知識(代名詞等の論理展開・構文・語い)も活用して英語を書くよう意識して指導する。
- ・例文等を書くことと、声に出すことを同時に行い、定着を図る。

<生徒の感想・テスト等の評価から>
 ・今年度前半までは、既習事項を繰り返し反復することに重点を置いた。その際、生徒も教員も、書くと同時に声に出すことで、理解と定着の度合いは高まったのではないかと考える。
 ・実践的な入試問題に取り組んだ今年度後半では、書く力の伸びを実感し、「仮説1」における英文を読み取る力や、「仮説2」における語いと結び付き、トータルとして書く力が高まったと感じている。

仮説 4**実践 4****検証 4**

<目標の設定と評価>
 ◇20年度からの継続・発展
 テストを活用し、全体の指導計画・生徒の状況に応じて目標を示し、到達点を教員と生徒が共有する。到達点を評価できるよう、テストを工夫し、復習教材としてテストを活用する。

- ・毎週のWeeklyテストや考査ごとに答案分析をし、「英語力をつけるうえで」を気をつけるべき課題(目標)を教員間で明らかにして、生徒に示したうえ授業にも反映し、次回のテストのポイントとする。
- ・定期テストの出題内容に「目標」を反映させる科目の特性にこだわらず共通の「目標」として設定する。
- ・小テストや考査を見直すことで、各自の理解のあいまいな点を解消し、長期レベルでの復習材料とする。

<生徒の感想・テスト等の評価から>
 <生徒の感想・テスト等の評価から>
 ・1年かけて目指したい到達点を示すことで、生徒は大きな目標を持って各自の課題を設定して学習を進めることができた。
 ・毎回の小テストや単元など、短期間の到達点を示すことで、生徒は取り組むべき課題を自覚し、スモールステップを刻んでいくことで励まされ、着実に進めることができたと思われる。
 ・日々の取り組みを、その時ごとに見直すことは、理解と定着の度合いを高めることになった。

研究の成果

<<生徒の感想・テスト等の評価から>

- ・生徒個人の差はあるものの、総体として実践的な入試問題を初めとして、自分で英文を読み進めていく姿勢と力を身に付けた。中には、限られた時間で長大な英文を読み、自分の意見を100語を超える英語で論理的にまとめられるような生徒もいる。
- ・このように学んだ生徒たちが、教材ではなく、これからは「実践」として英語を読み・聞くときに、適切に意図を把握でき、意見を述べたりできる「運用能力」が、長期的な視野での「研究の成果」になると思う。

今後の課題

- ・3年間の本プロジェクトで分かったことは、英語を学ぶには、扱う教材や形式の変化はあっても、学ぶ方法、目的や重視したい力はあまり変わらないということである。1年生で重視した項目の大半は、3年生まで引き継がれていった。仮説・実践を通して、どのような英語の力を伸ばしたいかを検証することのできた3年間であったと思う。
- ・小学校での英語学習が浸透し、中学校までの積み重ねがさらに期待される今後においても、この3年間で検証された「英語の力を伸ばす手法」を継承し、さらに発展させていきたい。